

Title	チェワ社会における仮面と変身信仰の研究
Author(s)	吉田, 憲司
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36411
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【3】

氏名・(本籍)	よし	だ	けん	し
	吉	田	憲	司
学位の種類	学	術	博	士
学位記番号	第	8430	号	
学位授与の日付	平成元年1月9日			
学位授与の要件	文学研究科 芸術学専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	Chewa社会における仮面と変身信仰の研究			
論文審査委員	(主査)			
	教授	木村	重信	
	(副査)			
	教授	谷村	晃	助教授 小松 和彦

論文内容の要旨

本論文は、中央アフリカ、ザンビア共和国東部に住む Chewa (Chewa) 族の社会での2年間にわたるフィールド・ワークに基づき、彼らの社会にみられる仮面文化を、憑霊現象、邪術信仰との関係において考究したものである。

Chewa族の社会には、男性だけで構成される仮面結社が存在する。この結社は Nyau (nyau) とよばれるが、Nyauという語はまた仮面を被った踊り手をもさす。Nyauの仮面には、死者を現したものと野性動物を表したものと2種類があり、とくに重要視されているのが野性動物の仮面である。Chewaの男たちのあいだでは、仮面はまず第1に「人間が野性動物に変身する」 munthu asanduka nyama 手段であるとみなされている。ところで、彼らの社会では、憑霊と邪術の行使もまた、「人間が野性動物に変身する」方法としてとらえられている。しかも、注目すべきことに、仮面を被った Nyau、ニシキヘビの霊の憑いた霊媒 (mgwetsa)、邪術師 (nfiti) の三者は、互いに忌避しあうとされる。したがって、Chewaの人々はこれら三者をひとつのセットを構成するものとして認識しているわけである。本論文において、筆者は、Chewa族自身の説明に依拠しつつ、仮面をこのような変身の体系の中に位置づけ、仮面、憑霊、邪術の三者のあいだの構造的および機能的な関連を明らかにしている。

本論文は、序と結びのほか、4つの章から構成されている。

まず、序において、仮面についての研究史が概観され、本論文の趣旨が述べられた後、第1章において、本論文でとりあげる Chewa族の社会が粗描される。この段階で、生業、社会構造、歴史など、以下の考察に必要な情報が提示される。

第2章は、Chewa族と動物とのかかわりを考察した章である。上述のように、仮面、憑霊、邪術の三

者は、いずれも「人間が野性動物に変身する」方法とされ、動物世界との関連において把握されている。このため、変身にまつわるチェワ族の信念を理解する基礎として、まず、彼らの動物認識のあり方が論じられる。すなわち、この章の第1節では、チェワ族の動物に関する民俗分類が示される。次に、第2節では、彼らの動物利用の実態が記述される。そして、第3節では、動物の登場する昔ばなし、比喩表現、菓の素材としての動物の利用などの検討を通じて、彼らが個々の動物に対して抱いている観念が明らかにされる。

以上の準備作業の後、第3章において、ニャウについての議論が展開される。はじめにニャウの仮面の形式と仮面群の構成が明らかにされた上で、ニャウのもっとも重要な活動とされる葬送儀礼の課程とそれを支える論理が詳述される。葬送儀礼、とくにボナ (bona) とよばれる喪明けの儀礼は、死者の霊を祖霊に移行させるという目的をもっている。この祖霊になってはじめて、死者は将来、その子孫に再生することができると考えられている。

続く第四章は、このニャウの活動を、それ以外の変身の形態、つまり憑霊および邪術との関係において位置づける章である。そのため、まず第1節と第2節が憑霊と邪術を個別的に考察する場にあてられる。

第1節では、チェワ社会にみられる憑霊現象の諸相が論じられる。チェワ族の社会においてもっとも古くから存在した霊媒と考へられるのは、ニシキヘビの霊の憑いた女性の霊媒である。彼女らは雨乞いの能力をもち、さらに、かつては成女儀礼の (chinamwari) の祭司をつとめていた。この節では、憑霊現象と成女儀礼の歴史の変遷を追うことによって、両者がもともと豊饒信仰のもとに一体となっていたことが論証される。

第2節では、邪術が議論の対象になる。まず、調査村落の住民全体を対象とした病歴調査の結果をもとに、彼らのあいだでは、重病と死の大半が人間の邪術に起因するものとみなされていることが明らかにされる。次に、チェワの人々が邪術師に対して抱いているさまざまなイメージが記述され、とくに邪術師が動物に変身して悪事をはたらくという信念が、彼ら特有の動物認識や空間認識のありかたに由来するものであることが指摘される。

以上の議論を基礎にして、第3節では、仮面を被ったニャウ、霊媒、邪術師の三者の特性が比較され、その関係が検討される。この結果、三者は互いに忌避しあうだけでなく、いずれも憑霊をとまう現象とみなされながら、その共通の枠組の中で、相互に区別されていることが明らかにされる。筆者は、ニャウ、霊媒、邪術師のあいだにみられるこのような区別は、これら三者がチェワ族の社会で果たしている機能に対応しているとする。すなわち、霊媒は成女儀礼と雨乞いの儀礼を先導することで人間の誕生と生をコントロールし、邪術師は人間を死に至らしめる唯一の存在となっている。そして、ニャウは、邪術によって殺された死者の霊を将来の再生を約束された祖霊に移行させ、さらに時がくれば、その祖霊を出産をひかえた女たちのもとに送り届ける。ニャウ、霊媒、邪術師は、単に変身の異なる形態としてひとつのセットを構成しているだけでなく、チェワの人々の死生観の中で機能的なシステムを形成しているというのが本論文の結論をなす。

結びでは、以上の議論が要約された上、仮面、憑霊、邪術の三者が改めて歴史的な文脈の中において

検討される。そして、最後に、上述の議論で用いられた構造的な方法論について省察を加え、さらに今後の研究への展望を述べて、本論文の論述は終わる。

本文、注、参考文献 計225ページ（1ページ：40字×30行）400字詰換算670枚、図11点、表27点、本文中に挿入。

別冊図版集（図版 52点）。

論文の審査結果の要旨

本論文はきわめて綿密なフィールド・ワークに基づいて、チェワ社会の仮面を彼らの変身信仰ないし憑霊信仰の体系の中に位置づけた論考である。仮面に関する詳細な民族誌的研究は世界的にみても数えるほどしか見出されないが、本論文は、実地調査で得られた民族誌的資料を整理するに留まらず、それを一定の見通しのもとに分析し、仮面およびその周辺分野の研究に新たな知見をもたらしたものとして高く評価される。

評価すべき第1の点は、結論として指摘された事実そのものに存する。従来、仮面はその背後にある神話やそれが用いられる儀礼との関連で論じられるのが常であり、いわばその象徴体系の内部で完結した存在として取り扱われるに留まっていた。このことは、程度の差こそあれ、憑霊や邪術の研究にもあてはまる。筆者は、チェワ族自身の認識に依拠することによって、これら三者の相互の關係に着目し、これまでまったく指摘されていなかった三者の相互規定性を明らかにした。本論文はチェワ社会を対象を限定した論考であるが、ここに提出されたモデルは、チェワ社会を越えて、仮面のみならず、憑霊、邪術の研究に新たな指針を与えるものである。

評価すべき第2の点は、その視野の広さである。仮面を被った踊り手、霊媒、邪術師の關係をとらえるにあたって、筆者はまずチェワ族の動物認識の分析を詳細におこない、さらに三者のあいだにみられる、性、禁忌、食生活、死者に対する態度などの違いをも考察している。この結果、仮面、憑霊、邪術の關係は、統一的な視点から具体的かつ実証的に把握されるに至った。

評価すべき第3の点は、とりあげられた個々の事象についての知見の深さである。本論文で論じられた仮面結社、成女儀礼、邪術といった事象は、いずれも外部の者を寄せつけない秘儀に属するものばかりである。仮面結社や成女儀礼の研究が乏しく、邪術の研究がともすれば概念的なレベルに留まりがちなのも、その秘密性によるところが大きい。筆者はみずから仮面結社に加入し、呪医に師事し、さらには同行した配偶者と共同作業をおこなうことによって、それぞれの事象についての内部からの視点を獲得することに成功している。とくに主題となっている仮面の社会的、宇宙論的役割についての考察は鋭く、造形と儀礼との關係や造形の美的評価の問題など、民族芸術一般の研究にとっても示唆する点が多い。したがって、草創期にある民族芸術学の分野において、本論文は今後基礎文献としての価値をもつに違いないと思われる。

評価すべき第4の点は、その記述の精度の高さである。本論文には、恣意性を排除し、検証可能な議

論を展開しようとする筆者の配慮が、随所にうかがわれる。たとえば、もろもろの現象の一般的傾向を指摘する際には、常に統計的データが付されている。さらに、象徴的な行為の意味づけにあたっては、徹底的にチェワ族自身の説明に依拠するという姿勢が貫かれている。この結果、構造論的な議論にありがちな恣意性や形式性が排除され、十分に説得的な論述が展開されている。一個の民族誌的資料としても、本論文の精度はきわめて高いといわなければならない。

以上、本論文の卓越した諸点を列挙したが、その一方で本論文には若干の問題点も認められる。たとえば、考究の対象がチェワ族の社会に絞こまれたがために、周辺民族との文化的影響関係が鮮明にされていないうらみがある。また、主たるテーマである仮面に関する詳細なデータに比して、憑霊や邪術についての資料がやや不足している。しかしながら、これらの点は、いずれも今後、改めて論じられるべき問題であり、本論文の価値を損うものではない。

以上のように、本論文は従来の研究の水準を越える優れた論考であり、芸術学と民族学との境界領域の問題を取り扱う研究者としての、筆者の資質をよく示している。学術博士（課程）の学位申請論文として、十分の価値を有するものと認定する。